

「エージェントとは、環境の状態を知覚し、行動を行うことによって、環境に対して影響を与えることのできる自律的主体である」（「マルチエージェントシステムの基礎と応用」）

従って、エージェントに対して作用するコマンドは、環境からの作用として環境情報をエージェントに与えるものと、他のエージェントからの作用を（環境が危険な状況とか、生きるに有利な状況が発生したときなどの、環境事象も仮想的なエージェントが生まれると考えることにします）エージェントに与えるものがあることとなります。

コマンドの表現は、プレーンテキストであるとして、構造を持ったデータ（コンセプト）は、先ず環境情報としてエージェントに複数のコマンド（構想情報：格情報をもったもの）で、コンセプトとして構築した後、作用コマンドで、そのコマンドを名前（プレーンテキスト）で指定して、実現するものとします。

脳は幾つかの機能毎の領野からなり、領野は一樣なコラムの集まりからなります。コラム達は並列分散処理を実現し、基本的な処理（チャンク）しますから、コラムはエージェント技術で表現できる物と考えられます。コンセプトは、このコラムが幾つか集まって構成するものであり、或一つの神経細胞がハブとなって、連想関係の集まりとなるでしょう。エージェントの一つのアンサンブルがコンセプトを構成していくと考えて良いと思います。

更に、アンサンブルは脳システムの構成時に設定されるものと、コンセプトの学習によって獲得する過程で、動的に構成されるものがあると思えます。感覚の種類とか、感情の種類とか、損得などの生きていく事柄に関する基本的なモーダル毎に、アンサンブルが作られ、そのアンサンブルを集合として見たとき、積集合が各コラムのもつ意味特性ということになります。これが、自己組織化に必要な事柄なのです。

人間が樅の木を見たとして、そのイメージというか意味を持ってコンセプトとなるとして、脳のどこに作られるのでしょうか。既に樅の木のイメージがあっても無くても先ず作業メモリに記録されるでしょう。樅の木の感覚、見たときの感情、何かの物だろうという環境情報から、そのアンサンブルが交差した領野の一つのコラムにイメージは作業メモリから移されるでしょう。既存情報であれば、重複管理の下に削除されるでしょう。新規ならば、コラムに取り込まれます。

このように、エージェントの動きはアンサンブルとして実現されるものであると考えられます。コマンドもアンサンブル単位に送り込み、エージェントは自律でコマンドを選択して行動していくのではないのでしょうか。データは格情報によって構造が提示されていますので、この構造を手がかりにデータ選択をしていくことになります。

おわり